日本中国語学会会報　2026年6月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　松江崇（日本中国語学会会長）……2

研究例会実施報告　2026.1-2026.6……3

会議報告……5

全国大会および研究例会、「中国語学セミナー」開催のお知らせ……11

事務局からのお願いとお知らせ……12

ご挨拶　　松江崇（日本中国語学会会長）

私が本会に入会したのは大学院修士課程に在学中の 1997 年のことです。当時、中国語学専攻の院生は、何よりも先ずは本会に入会し、そこでの成果発表を主な目標とするのを当然のこととする雰囲気が――少なくとも私のまわりには――あったように思われます。ところが三十年近くたった今、若手の中国語学研究者であっても、海外の学会や他の言語系学会を「主戦場」とするケースが増えたように感じられます。国際化の進展や言語理論の深化を背景に、より専門性の高い研究者コミュニティでの発表を重視する傾向が生じたのかもしれません。本会の斯界における位置づけは、かわりつつあるようです。

とはいえ、文献言語学から理論言語学、さらにフィールド言語学や教育法・対照言語学に至るまで、方法論と研究対象の双方での幅広さを持ちあわせた本会の存在意義は、決して失われたわけではありません。学問分野の細分化の著しい近年においてこそ、広義の「中国語」を紐帯として、視座の異なる研究に接することの意義は、むしろ増していると考えます。そしてこのような本会の備える研究環境上の魅力は、八十年にせまる先達の努力の蓄積によって築き上げられたものであることは言うまでもありません。

さて、このような伝統を誇る本会にも、近年、直面している課題がいくつかあります。

一つは、本会における研究活動件数（学会誌投稿数、大会参加数など）の減少です。直接的には会員数の減少という抗い難い傾向に起因するのでしょうが、研究活動の活性化を促すしくみを導入することは可能なはずです。この点については、佐々木勲人前会長の時期に、『中国語学』査読指針の公開、支部例会の研究例会への組み換え、全国大会への招待発表の導入といった改革がなされました。これらを継承し、その効果を検証した上で、研究活動のさらなる活性化に向けた改善策を講じていくことが必要です。

いま一つは、本会の社会的責任の再検討です。本会では、近年に限っても「中国語学セミナー」の開催（2019 年～）、日本中国語学会編『中国語学辞典』の刊行（2022 年）といった重要な事業がおこなわれてきました。前者は日本の中国語学教育を補完すること、後者は斯界の最新の研究成果を社会へ還元することを意図したものですが、全国学会としての社会的責任に応えたものとも言えるでしょう。今後とも本会が果たすべき社会的な責任・役割を再検討しつつ、必要な対応を考えていくことが求められます。

以上のような課題を心に留めおきながら、学会の運営にとりくんでまいります。副会長の遠藤雅裕さん（中央大学）、幹事の戸内俊介さん（日本大学）、野原将揮さん（京都大学）、宮島和也さん（京都大学）とともに、事務局を運営してまいります。二年間、どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今年 11 月に岡山大学・津島キャンパスで開催される全国大会について、ご案内いたします。全国大会は、上に述べたような本学会の「本領」を体感し得る、またとない機会です。また、岡山大学は湯淺文庫を有するなど、中国と浅からぬ縁があるとも聞き及んでいます。会員の皆様のご参加を切にお願いする次第です。

［2026 年 6 月 5 日記］

2026 年 6 月

研究例会実施報告　2026.1-2026.6

◆2025 年度第 6 回研究例会

◇2026 年 1 月 24 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・鈴木俊哉（広島大学）：祁寯藻本『説文解字繫傳』の早印本といわゆる欠本系統写本の小篆

現在、『説文解字繫傳』（いわゆる「小徐本」）の定本として、最後の清刻本である祁寯藻本が用いられる。祁寯藻本は脱落こそ少ないが（足本と呼ばれる）、通行本に大徐本へ近づける修正が見え、王筠のように底本の真贋を疑う立場もあった。この修正前の小篆について、足本系統写本の述古堂本や、伝抄経路が異なる『説文篆韻譜』と符合することを董婧宸が報告している。それらの箇所を脱落の多い欠本系統の写本である朱筠本・翁方綱本・丁杰本と比較すると、少なくとも朱筠本・丁杰本とはよく符合する。『繫傳』写本の小篆字形は説文関連の写本の中では拙劣な印象を与えるが、これが足本・欠本の分岐以前の姿を残していた可能性が考えられる。

・周碩（広島大学・院）：日本語「新出人称表現」の意味変化と中国語への受容―「族」と「系」を中心に―

インターネット時代以降、中国語に流入した日本語借用語の中には、サブカルチャーと結びついた新出人称表現が顕著に見られるようになった。注目すべき初期例として挙げられるのが「族」と「系」である。日本語における「族」は 1950～80 年代に若者文化を象徴する語として広まり、社会的他称として機能した。一方、「系」は 1980 年代以降、嗜好を緩やかに分類する表現や流行的カテゴリーを指示する。これらの語は 1990 年代以降中国語に借用され、「族」は行動様式を共有する集団名として中性化し、「系」は主観的評価を表す語として生産性を示すようになった。結果として、両者はいずれも「指人類詞綴」として現代中国語の語形成体系に定着したといえる。

◆2025 年度第 7 回研究例会

◇2026 年 2 月 14 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

テーマ：中国語教育のための応用中国語学をめざして

・主旨説明：鈴木慶夏（神奈川大学）

・森篤嗣（武庫川女子大学）：【特別講演】文法・語彙項目の精選と最適化―言語学の「オマケ」からの脱却―

言語教育において「どうやって教えるか」と同じかそれ以上に、「何を教えるか」は重要である。「何」に当たる文法・語彙項目については、言語学で研究されるものだという意見もあろうが、言語教育学は「教えるときどう扱うべきか」に重きを置くべきである。2000 年以降、私たちは「日本語教育文法」という枠組みで進めてきた。そこには三つのポイントがあった。一つ目はコーパスの登場、二つ目はノンネイティブ研究者との共同、そして三つ目が言語学の「オマケ」からの脱却である。「日本語学の研究は結果として教育にも役立つ」という楽観論は、日本語学

と日本語教育の乖離を生んだ。「教えるための項目の精選と最適化」はそれに抗う術である。

・西香織（明治学院大学）：中国語教育文法は何を目指すのか―言語学と教育学の「ハザマ」から―

中国語教育は従来、中国語学の体系を教育に応用する周辺的領域として扱われてきた。とりわけ近年は授業ツールへの関心が高まる一方、何をどの段階でどのように教えるかという中国語教育学の本質的課題が後景化している現状がある。われわれは、学習者が具体的場面で適切に運用できるよう項目を再編した体系を「中国語教育文法」と呼び、その構築を進めてきたが、各分野から大きな関心を得るには至っていない。その背景には、中国語学と中国語教育学の乖離だけでなく、両者を結ぶ中間領域を十分に位置づけてこなかったことがあるのではないか。本発表では、この「ハザマ」にある課題を整理し、中国語教育文法が目指すべき原理と方法を提示したい。

・建石始（神戸女学院大学）：中国語学習者から見た中国語初級文法―中国語教育と日本語教育が「ナカマ」に―

本発表は、日本語学・日本語教育学が専門であり、中国語学習者でもある発表者が中国語初級文法について考えるものである。2000 年代に入るまでの日本語教育においては、日本語をどう教えるかについては盛んに議論されていたが、何を教えるのかについてはあまり議論されてこなかった。また、当時の日本語教育の文法教育観やシラバスの設計理念は、日本語学の視点に大きく依存していた。そのような状況のもと、初級文法シラバスをどう作成するのかということを中心に日本語教育文法が提唱され、数多くの成果が提示されている。日本語教育文法が提唱され始めて 20 年以上が経過したが、その成果を検討しながら中国語初級文法について考えてみたい。

◆2025 年度第 8 回研究例会

◇2026 年 3 月 7 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・大嶋広美（広島大学）：T.H. Lee『Hakka Lessons』にみるマレーシア客家方言

これまでマレーシアにおいて刊行された客家方言に関する資料は数点存在するが、その中でも 1950 年代に出版された T. H. Lee 著『Hakka Lessons』は、他のテキストと異なり、内容の豊富さと言語学的解釈を伴う点において特に注目される。著者の Lee 氏は、本書で扱う客家方言は梅県方言に基づきつつも、実際にマレーシアで使用されている客家方言に即して記述したと述べている。本報告では、テキストに見られる発音・語彙などを現在のマレーシア客家方言の調査結果と照合し、梅県方言との差異にも着目しつつ、本書に見られる特徴を分析する。あわせて、このテキストの成書過程と今回の初期調査によって明らかとなったマレーシア客家方言の諸特徴についても報告する。

・杨安娜（北海学园大学）：上古汉语“主之谓”句法特征问题小议

上古汉语“主之谓”结构的句法特征传统上存在两种对立的观点。(1)“名词性结构（“之”取消句子独立性）”说（1948/1982，王力 1980，李佐丰 1983，大西克也 1994，孙洪伟 2008 等），(2)“谓词性结构”说（何乐士 1989/2004，姚振武 1995，宋文辉 2010，梁银峰 2016 等）。近年来也有一批学者从

形式句法学角度对此进行了深入探讨：如杨萌萌（2019）提出该结构为“非定式句”，田源/徐杰（2016）提出“之”为标句词的看法，景黎黎/洪波（2019）则从类型学角度出发，认为“主之谓”是小句名词化。但这些观点都无法有效解释“主之谓”结构可以“独立成句”的问题（如：子曰：“予之不仁也！”《论语·阳货》；君子曰：“众之不可以已也。”《左传·成公二年》）。本文将从引语理论研究视角－即：“之”为间接引语标记，“主之谓”为间接引语构式的观点来尝试对此进行统一解释。

2026 年度第 1 回研究例会

◇2026 年 6 月 13 日（土）午後 1 時～　オンライン（Zoom）による開催

・鎮守琳（関西大学）：『老乞大』の“兀那”“兀的”“阿的”の分析―話し手に基づく三層構造の観点から―

本発表は、『老乞大』旧本に見られる“兀那”“兀的”“阿的”の用例を対象に、その機能について検討したものである。従来、これらは“这”“那”に対応する近称・遠称として説明されることが多いが、実際の用例をみると、単純な距離対立のみでは捉えきれないことが見られる。本発表は、“兀那”は方角・位置、“兀的”は提示・授受・操作可能対象、“阿的”は経験との関わりが見られる点に注目し、それぞれの用法の違いについて整理を試みた。

会議報告

■編集委員会

◆第 1 回編集委員会（『中国語学』273 号）

日時：2026 年 3 月 20 日（日）（Zoom によるオンライン開催）

出席者：伊藤さとみ（委員長）、鋤田智彦、吉田泰謙、盧建、荒木典子、小嶋美由紀、張盛開、劉驫（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 273 号の投稿論文について

・投稿総数は 26 篇。審査の結果 26 篇を受理した。分野別内訳は、教育 1、現代文法 15、文字 1、方言音韻 2、方言文法 2、歴史音韻 1、歴史文法 4 である。各篇について査読者各 3 名を決定した。査読報告書の提出期限を 5 月 6 日（水）とし、5 月 16 日（土）の第 2 回編集委員会において採否の決定を行うこととした。

2. 『中国語学』第 273 号の特集記事について

・2025 年度全国大会での特別講演の講演者定延利之教授および招待発表の下地早智子会員、石村広会員に寄稿を依頼した。

3. 2025 年度学会奨励賞の候補者について

・『中国語学』第 272 号に掲載された論文の執筆者の中から 1 名を選出し、5 月 16 日（土）の第 2 回編集委員会において候補者を決定することとした。

◆第 2 回編集委員会（『中国語学』273 号）

日時：2026 年 5 月 16 日（土）（Zoom によるオンライン開催）

出席者：伊藤さとみ（委員長）、鋤田智彦、吉田泰謙、盧建、荒木典子、小嶋美由紀、張盛開、劉驫（以上委員）

【議事】

1. 『中国語学』第 273 号の投稿論文の採否に

ついて
・受理した投稿論文 26 篇について、査読結果に基づいて審議した結果、9 篇を要二次審査、17 篇を不採用とした。要二次審査の 9 篇については、7 月 10 日（金）必着で修正論文の提出を求め、編集委員会において二次審査を行った上で、掲載の可否を最終決定することとした。
2. 『中国語学』第 273 号の特集記事について
・特集記事に関する進捗状況を確認した。
3. 2025 年度学会奨励賞の候補者について
・第 1 回編集委員会で選出した 1 名の候補者について審議を行い、最終的な結論に達した。

■大会運営委員会

◆第 1 回メール審議（2025 年 12 月 15 日～12 月 31 日）
委員：石崎博志(委員長)、池田晋、石井友美、加納希美、澤田達也、張玥、張恒悦、丸尾誠、三木夏華、望月雄介、八木堅二
【議事】
1. 次回大会の開催方法
・次回大会の開催形式は 1 日目、2 日目とも対面開催のみとした。
2. 研究発表応募規定の検討
・予稿集を大会前に一般公開することとした
・講評制度を廃止することとした。
・共同発表者にも参加を義務づけることとした。
3. 招待発表
・招待発表は昨年同様に実施することとした。
・委員より招待発表の候補者を推薦してもらった。

◆第 2 回メール審議（2026 年 1 月 15 日～30 日）
委員：同上
1. 招待発表者 2 名の推薦と承認
・招待発表の候補者から二次投票を行い、クリスティーン・ラマール先生名誉会員（INALCO）と佐々木勲人前会長（筑波大学）に依頼することに決定した。

◆第 3 回メール審議（2026 年 1 月 15 日～30 日）
委員：同上
・第 76 回大会の各種応募に先立ち、ウェブサイトに掲載する各種応募関係書類の文言確認を行い、あわせて中国語版を作成した。
(1) ワークショップ応募規定（日・中）
(2) 一般発表応募規定（日・中）
(3) ポスターガイドライン（日・中）

◆第 4 回メール審議（2026 年 5 月 18 日～26 日）
委員：同上
【議事】
1. 第 76 回会費
・第 76 回全国大会の参加費・弁当代・懇親会費について審議した。
2. 第 77 回大会
・候補校について審議した。

■学界展望編集委員会

1. 2025 年「学界展望　語学」の編集
・2026 年 3 月 1 日に学界展望編集委員会委員に執筆依頼を送付し、5 月 20 日をめどに初稿を取りまとめることとした。文字数は例年通り全体で 15,000 字。
・今次の学界展望は、2026 年 10 月発行予定の『日本中国学会報』第七十八集に掲載され、『中国語学』第 273 号に転載される予定であ

る。

2. 「学界展望　語学」中国語版

・翻訳補助チームの増員メンバーとして、王牧会員（東京大学）に業務を依頼することとした。

・今年度は 2024 年の「学界展望　語学」中国語版が作成されるはずであるが、2026 年 5 月 8 日現在、中国語訳を担当する中国社会科学院文学研究所からの連絡はない。2023 年の「学界展望　語学」中国語版についても、連絡はない。

・2022 年の「学界展望」中国語版については、『古代文学前沿与評論』に掲載されたとの情報が 2026 年 3 月に日本中国学会の出版委員会より伝えられた。これは『日本中国学会報』第七十五集に掲載されたものである。

3. その他

・「学界展望　語学」で言及する著述を偏りなく選定するための方法を検討することにした。

・懸案となっている、適任者を探すのが困難な領域については、他の領域との合併も視野に入れて、引き続き検討することにした。

■2026 年度第 1 回理事会

日時：2026 年 5 月 17 日（日）13 時～16 時
（対面と Zoom のハイブリッド開催）

出席者：松江崇（会長）；遠藤雅裕（副会長）；石村広；吉川雅之（学界展望編集委員長 [兼任]）；伊藤さとみ（編集委員長 [兼任]）（以上理事）；石崎博志（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；戸内俊介、野原将揮、宮島和也（以上幹事）

欠席者：丸尾誠；加藤晴子；下地早智子（学会セミナー担当 [兼任]）（以上理事）；

【報告事項】

1. 一般報告

(1.1) 役員・委員等の異動

・評議員交代

関東支部：
石村広（中央大）
豊嶋裕子（東海大）
宮島和也（京都大）〔以上退任〕
→鈴木慶夏（神奈川大）〔新任〕

北陸支部：
◎福田 翔（富山大）〔新任〕

東海支部：
丸尾誠（名古屋大）〔退任〕

関西・四国支部：
任鷹（神戸市外語大）
秋谷裕幸（愛媛大）〔以上退任〕
→西村英希（近畿大）
野原将揮（京都大）〔以上新任〕

九州支部：
木村裕章（北九州市立大）
馮蘊澤（熊本学園大）〔以上退任〕
→◎川澄哲也（九州大）
謝平（福岡大）〔以上新任〕

※◎は世話人

・ウェブリソース委員交代

山崎直樹（関西大）
植屋高史（京都外国語大）〔以上退任〕
→干野真一（新潟大）〔新任〕

(1.2) 会員動向（2026 年 4 月 1 日現在）

・会員数　4 月 1 日現在　（増減は 2025 年 10 月 1 日を基準とする）

			4/1 現在	増減
総会員数（賛助会員をのぞく）			848 名	－46
	（内訳）	顧問	10 名	±0
		名誉会員	9 名	±0
		通常会員	751 名	－40

		団体会員	2 名	−2
		海外会員	76 名	−4
賛助会員			19 社	±0

〔昨年度除籍者〕　35 名（国内会員　29 名 / 海外会員　6 名）

ご逝去　1 名（川端 加代　会員）

2. 支部例会関連

(2.1) 世話人交代

北陸支部：加納希美（金沢大）
→福田 翔（富山大）

関西・四国支部：田中智子（関西国際大）
→吉田泰謙（関西外国語大）

九州支部：木村裕章（北九州市立大）
→川澄哲也（九州大）

(2.2) 今年度の研究例会等開催スケジュール

6 月 13 日(土)　第 1 回研究例会
関西・四国支部担当

7 月 11 日(土)　第 2 回研究例会
東北支部担当

8 月 8 日(土)　第 3 回研究例会
北陸支部担当

8 月 29 日(土)【第 8 回中国語学セミナー】
理事会担当

10 月 3 日(土)　第 4 回研究例会
東海支部担当

11 月 14 日・15 日　【第 76 回全国大会】
岡山大学開催

12 月 12 月(土) 第 5 回研究例会
九州支部担当

1 月 23 日(土)　第 6 回研究例会
北海道支部担当

2 月 13 日(土)　第 7 回例会
関東支部担当

3 月 13 日(土)　第 8 回例会
中国支部担当

3. 大会運営委員会報告

石崎委員長より次の報告があった。

(3.1) 委員の交代

2025 年 12 月 1 日

・退任：橋本永貢子委員長(岐阜大。大会運営委員長)、張佩茹会員（東北大。2025 年開催校代表）、加藤晴子理事（東京外国語大。理事枠）、戸内俊介会員（日本大）、野原将揮会員（京都大）

・就任：石崎博志委員長（関西大。大会運営委員長）、石井友美会員（岡山大。2026 年開催校代表）、丸尾誠理事（名古屋大。理事枠）、三木夏華会員（鹿児島大）、望月雄介会員（松山大）

(3.2) 第 75 回大会（東北大学）で見られた問題について

・問題点を精査し、対応策を検討・確認した（2025 年 11 月 12 日～22 日）。

(3.3) 第 76 回大会の準備状況

1) 日程・開催校・代表者・開催形態

［日程］2026 年 11 月 14・15 日（土・日）

［開催校］岡山大学津島キャンパス（岡山県岡山市）

［代表者］石井友美会員

［開催形態］対面

2) 特別講演（1 日目）

・田窪行則名誉教授（京都大学・国立国語研究所）

3) 招待発表（2 日目）

・クリスティーン・ラマール名誉会員（フランス国立東洋言語文化学院）

・佐々木勲人前会長（筑波大学）

4) 各種発表の募集期間

・ワークショップ：5 月 17 日（日）～5 月 31

日（日）
・研究発表 : 6 月 16 日（火）～6 月 30 日（火）
5) 予稿集原稿提出期間
・9 月下旬を予定。
6) 託児所
・学内に設置の予定。
7) 参加申し込みおよび参加費
・昨年同様、事前に参加申し込みおよび参加費の支払いを推奨する（Peatix を利用する予定）。当日の受付もあり。

4. 編集委員会報告

伊藤委員長より次の報告があった。
(4.1) 『中国語学』273 号特集およびその依頼論文について
・石村広氏、下地早智子氏、定延利之氏より寄稿論文を受け取った。編集委員会で形式面のチェックが済み次第、入稿の予定である。
(4.2) 『中国語学』273 号査読結果報告
・受理した 26 件中 9 件を要二次審査、17 件を不採用とした。
・事務支局、中西印刷と打ち合わせ、巻頭論文と S 論文については、7 月 27 日が入稿最終期限、要二次審査論文については、8 月 5 日が入稿最終期限と決定した。
(4.3) 2026 年度学会奨励賞の候補者について
・学会奨励賞の授賞者を編集委員会の原案通り承認した。
(4.4) 次期委員について
・2 名の会員に次期委員の就任を依頼することに決定した。残るもう 1 名については、7 月をめどに依頼する。
(4.5) 投稿用テンプレートの修正について
・投稿用テンプレートに修正を加えることとした。その上で、修正案に基づき編集委員会が再度取りまとめることとなった。
(4.6) その他
・査読依頼作業量の増大に伴う査読システム、及び剽窃チェッカーの導入について意見を交換した。

5. 学界展望編集委員会報告

吉川委員長より次の報告があった。
(5.1) 2025 年「学界展望　語学」の編集
・2026 年 3 月 1 日に学界展望編集委員会委員に執筆依頼を送付し、5 月 20 日をめどに初稿を取りまとめることとした。文字数は例年通り全体で 15,000 字。
・今次の学界展望は、2026 年 10 月発行予定の『日本中国学会報』第七十八集に掲載され、『中国語学』第 273 号に転載される予定である。
(5.2) 「学界展望　語学」中国語版
・翻訳補助チームの増員メンバーとして、王牧会員（東京大学）に業務を依頼し、ご快諾いただいた。
・今年度は 2024 年の「学界展望　語学」中国語版が作成されるはずであるが、2026 年 5 月 8 日現在、中国語訳を担当する中国社会科学院文学研究所からの連絡はない。2023 年の「学界展望　語学」中国語版についても、連絡はない。
・2022 年の「学界展望」中国語版については、『古代文学前沿与評論』に掲載されたとの情報が 2026 年 3 月に日本中国学会の出版委員会より伝えられた。これは『日本中国学会報』第七十五集に掲載されたものである。
(5.3) その他
・「学界展望　語学」で言及する著述を偏りなく選定するための方法を検討することにした。
・懸案となっている、適任者を探すのが困難な領域については、他の領域との合併も視野に入れて、引き続き検討することにした。

6. 除籍候補者と住所不明者について

松江会長より、除籍候補者と住所不明者の今年度の状況について報告が行われた。併せて、住所不明者に関する情報提供が呼びかけられた。

7. その他

(7.1) 松江会長から「研究例会開催のガイドライン」の文言を改訂した旨、報告が行われた。

(7.2) 松江会長より、J-STAGE 未掲載論文について、今後掲載へ向けた調査を行う方針が示された。

【審議事項】

1. 今年度の全国大会について

(1.1) 開催形式について

・石崎委員長より、今年度の大会の開催形式について提案があり、対面形式のみで行うことが承認された。

(1.2) 講評制度の廃止

・石崎委員長より、現状では発表者による時間超過等で質疑応答の時間が確保できない、また講評者は短期間で講評を準備する必要があり、その負担は極めて大きいといった問題があるため、制度を廃止したいとの提案があり、承認された。

(1.3) 予稿集の公開

・石崎委員長員長より、近年のオープンアクセスの推進、透明性の向上、および国内外への研究成果の公開を目的とし、大会開催前に学会ウェブサイトで一般公開する旨の提案があり、承認された。

・公開の具体的な時期については、大会運営委員会にて再検討することとなった。

(1.4) 共同発表者の参加義務

・石崎委員長より、共同発表者が大会に参加しない事例が散見される現状に対し、研究への実質的な貢献がない者が発表者として名を連ねることはオーサーシップの正当性を損なうこと、また不正指摘の際に説明責任を果たせない懸念があることが指摘された。これに基づき、共同発表者にも大会への参加を義務づけるよう規程（またはガイドライン等）の文言を変更することが提案され、承認された。

(1.5) 招待発表について

・第 76 回大会は前回同様に招待発表を一般発表の分科会のスケジュールに組み込み、1 人あたり 45 分（1 セッション 2 名）で行うことが承認された。

2. 第 77 回全国大会について

・石崎委員長より次期開催校について以下のとおり提案があり、承認された。

［日程］2027 年

［開催校］大東文化大学

［代表者］田村新会員

［開催形態］未定

3. 中国語学セミナーについて

・欠席の下地理事に変わって松江会長より第 8 回中国語学セミナーの実施案について報告が行われ、承認された。

■臨時理事会・臨時評議会

・臨時理事会（2026年6月1日15時～16時、6月5日13時～14時、Zoomによるオンライン会開催）

・松江会長から、会員から研究倫理に関する申し立てがあったことが報告された。また当該の事案を審議するため、臨時倫理委員会を設置することが提案され、承認された。

・臨時評議会（2026年6月6日～6月15日（メール審議）

・臨時理事会で承認された臨時倫理委員会の設置の可否について審議を行い、承認された。

全国大会および研究例会、「中国語学セミナー」開催のお知らせ

第 76 回全国大会開催のお知らせ

すでに学会ウェブサイトでご案内しておりますとおり、今年度の大会は岡山大学津島キャンパスを本部として 11 月 14 日（土）～11 月 15 日（日）に対面で開催されます。ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。本年度の発表申し込み期間は、6 月 16 日（火）より 6 月 30 日（火）です。

採択者一覧、大会プログラムは 7 月末以降に学会ウェブサイト上に順次アップする予定です。なお、予稿集は第 70 回より電子版のみの刊行となっております。詳細は学会ウェブサイト等をご参照ください。

（事務局）

今年度の研究例会実施予定

研究例会実施予定は次の通りです。

第 1 回　関西・四国支部担当：6 月（開催済）
第 2 回　東北支部担当：7 月
第 3 回　北陸支部担当 :8 月（発表者募集中）
第 4 回　東海支部担当：10 月
第 5 回　九州支部担当：12 月
第 6 回　北海道支部担当：1 月
第 7 回　関東支部担当：2 月
第 8 回　中国支部担当：3 月

みなさまのご参加を歓迎します。開催時期および回数は変更になることもありますのでご了承ください。開催日程、申込締め切り、連絡方法などにつきましては学会ウェブサイトでご確認ください。なお、発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。詳細については、開催担当支部の世話人までお問い合わせください。

（事務局）

第 8 回「中国語学セミナー」開催

・開催日時：2026 年 8 月 29 日（土）13:30～17:00（日本時間）
・開催形式：Zoom ミーティングによるオンライン開催
・聴講料：聴講無料、事前登録不要、ミーティング URL はメールで配信
・講師、講義題目、講義要旨（登壇順）：

13:40–15:10 竹越孝（神戸市外国語大学）「テキストの対照から言語変化を捉える」

このセミナーでは、近代漢語（近世中国語）の資料からどのような言語変化が見て取れるか、言語変化の原因をどのように考えるべきかを、テキストの対照から追求する方策について紹介したい。総論として、近代漢語の範囲と主要文献、その間に起こった主な語彙・文法上の変化を概観したのち、各論として、朝鮮王朝時代の漢語教科書『老乞大』における 4 つのテキストを対照

させることによって見出される、元・明・清代の北方方言で生じた言語変化の実例を検討する。また、同書を含む朝鮮資料の基礎方言の問題や、いわゆる域外資料を扱う際の注意点などについても言及する。

15:30-17:00 三宅登之（東京外国語大学）「認知言語学の手法で中国語を分析してみよう――いわゆる「行為解説の進行形」をモデルケースとして――」

本セミナーでは、認知言語学的手法で中国語の文法現象を分析する研究の一例を紹介する。モデルケースとして取り上げるのはアスペクトの進行相で、英語の“When he said that, John was lying.”（そう言った時、ジョンは嘘をついていた。）のような、いわゆる「行為解説の進行形」（the interpretive use of the progressive）に該当する進行相の用法が、中国語にも存在することを述べる。その際、イメージ・スキーマ（image schema）、図と地（figure and ground）などの代表的な認知言語学のツールを用いて、そもそも当該用法がどのような意味合いを持つのかについての解釈を試みる。このケースをもとに、中国語を分析する際の認知言語学の視点の有効性とは何かについて考えてみたい。

（事務局）

事務局からのお願いとお知らせ

■ 名誉会員の推挙について

名誉会員の推挙は、9 月 30 日までに推薦文を添えて、事務局宛にメール送付をお願いします。なお、名誉会員称号授与の条件は、年齢満 70 歳以上で継続して 20 年以上本会会員であった方のうち、本会の発展に功労のあった方となっており、理事会、評議会の審議を経た上で会員総会において決定されます。

■ 住所不明の会員

事務局より送付した郵便物が返送されてきた会員のお名前を掲げておきます。もし御自身のお名前を見つけられましたら、速やかに e-naf から住所変更の手続きを行なってください。またお知り合いの方のお名前がありましたら、事務局までご連絡をお願いします。

荒屋勸、泉興長、丁鋒、楊達、杜暉、張佳妮、王漫、王珍、李丹芸、アブリミテイ・マイラー、李仁治、林智、羅子皓、黄欣悦、章悦、赵云杨、岳世敏、王欣蕊、梁晨

■ 2026 年度会費納入のお願い

2026 年度（2026 年 4 月～2027 年 3 月）の会費（国内通常会員 6,000 円、海外会員 6,000 円）の納入をお願いいたします。8 月 31 日まで（**研究発表応募者は 6 月 30 日まで**）に会費納入専用振替口座【00980-6-282216 日本中国語学会】あてにお願いします。

内規により「2 年を超えて会費の納入がない場合は、当該会員に連絡の上、除籍」となりますのでご注意ください。

会費納入状況は、オンライン会員情報管理システム（clara）により直接ご確認いただくことができます。同システムは、住所・勤務先を始めとする各種変更手続きにもご利用いただけます。

オンラインクレジットカード決済も可能となっております。clara にログインの上、＜会費支払い状況確認＞からお支払いください。

■ 会員情報更新のお願い

オンライン会員情報管理システム（clara）にアクセスして、ご自身の会員情報の確認と更新をお願いします。

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会ご希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は、第69回以前のものは好文出版にて1,500円でお求めになれます。第70回以降の大会予稿集は電子版のみの発行（非売品）です。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先（2028 年 3 月まで）

事務局への送付先は以下の通りです：

〒606－8501　京都府京都市左京区吉田二本松町　京都大学人間・環境学研究科内
日本中国語学会事務局宛

また各種のお問い合わせは、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

2026 年 6 月

日本中国語学会会報 2026 年春季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒606-8501　京都府京都市左京区吉田二本松町　京都大学人間・環境学研究科
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/
発行日：2026 年 6 月 30 日